

## 当科で経験した降下性壊死性縦隔炎の1症例

田中浩喜 兵行義 宇野雅子 粟飯原輝人 原田保

川崎医科大学 耳鼻咽喉科教室

降下性壊死性縦隔炎は深頸部膿瘍から伸展した縦隔炎のことで、深頸部の膿瘍が縦隔に波及すれば致死率20～40%と言われ非常に重篤な疾患である。抗菌薬の発達した現在においても、糖尿病など基礎疾患の有する場合は注意を要する疾患である。今回我々は扁桃周囲膿瘍から生じた降下性壊死性縦隔炎の1例を経験したので報告する。

症例は55歳女性。主訴は咽頭痛であった。現病歴は5月25日から咽頭痛が出現し、近医内科を受診し、キノロン系抗菌薬を処方されていたが、翌日から含み声になり、嚥下時痛の増悪があったが、数日間様子を見ていた。5月29日唾液の嚥下も困難になり当院救急外来に独歩で受診。扁桃腫脹を認めたために当科紹介受診となった。糖尿病などの基礎疾患はなかった。全身状態は良好、発熱なし。視診上は右扁桃の腫脹と発赤、軟口蓋の偏移を認めた。著明な頸部痛や後頸部痛は認めなかった。採血上白血球：10490 CRP：29.26と高値を認めた。膿瘍範囲の確認のために、造影CT検査を施行したところ、扁桃周囲から深頸部に波及しさらに咽頭後壁から危険間隙を通り、縦隔内までガス産生を伴う膿瘍形成を認めた。同日緊急に頸部外切開による切開排膿術、気管切開術を施行。右扁桃から深頸部および食道後壁、椎前筋、上縦隔まで乳白色の膿汁をみとめた。術後からMEPNの投与と局所の洗浄を施行し、画像上の膿瘍の消失し症状も軽快し、病状に対して経過良好な経過をたどった。